

---

# そんな二人のコンディトライ

夢月@

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そんな二人のコンデイトライ

### 【Nコード】

N8407Z

### 【作者名】

夢月@

### 【あらすじ】

「あ、みて！ お客さんが待つてるわ！」  
「君はみつともない顔をお客さんの前でさらすな！ さっさと顔洗え！」

しっかりもののブルーノとドジっ子のアーシエは双子。そんな二人は、小さな田舎町グリユックにある洋菓子店を営むことになって？ 双子とグリユックの住民がおくる小話。

そんな二人のコンディトライ(前書き)

コンディトライ(ドイツ語でお菓子屋さん)

## そんな二人のコンディトライ

小さな田舎町、グリユックにて小さな洋菓子店ができたのはよく晴れた日のこと。

そんな洋菓子店から漂ってくるのは、甘い砂糖の匂いでも焼きだてのパイの匂いでもありませんでした。

「ブルーノ！ アップルパイ焦げてるわ！ どうしましょう……」  
「アーシエ！ 君はもうじつとしてて！ 後は俺がやるから」

洋菓子店から漂うのは焦げたアップルパイの匂いだったのです。さて、ご紹介が遅れました。洋菓子店の店長を務めるのは双子の青年ブルーノと乙女アーシエ。二人はよくにたアーモンド色の髪の毛にブラックベリー色の瞳をしていました。

そんな二人ですが、現在は店内を忙しく駆け回っています。それもそのはず、なんと開店一時間前だったのですから。それにしても一体全体、何故不安だらけのこの二人が洋菓子店を開店するに至ったのでしょうか？ ブルーノは、段差で躓いているアーシエを横目に今までのことを思い出しました。

「ブルーノはとて面白いパティシエになると思っただよね。でさ店、持たない？ あ、アーシエも一緒に」

双子の居候先兼パティシエの師匠キリルは、朝ご飯を食べている

双子にさらりと言い放ちました。

二人がキリルの元で暮らして約七年。ブルーノがキリルの元で働いてから約五年。やっと巡り巡ってきたチャンスに、ブルーノは持っていたトーストを落としそうになりました。

「ほ、本当！？ キリルさん!？」

「私、パティシエじゃないけれど行ってもいいのかしら」

キリルは若き頃　といってもキリルは今でも十分若いのですが　を思い出して微笑ましくなりました。自分も店を任せられた時、嬉しかったことや緊張したこと。

「うん。ブルーノもアーシエが居なくちゃホームシックになっちゃうだろうしね」

「そんなことないよ！　ああ、でも楽しみだなあ」

ブルーノはこれから自分が店を持つのだという嬉しくなりました。自分だけの店！　彼にとってこれほど誇らしいことはありません。

「まあ、気楽に頑張ってね」

「はい！」

今でもあの時のことを思うと、騙されたと感じます。何故なら、任されたのが田舎の洋菓子店でその上お店自体も蜘蛛の巣がはっているほど古びた家だなんて聞いていないからです。それでも二人で

頑張つて、掃除をして洋菓子を扱う店としてふさわしくなりました。

「ああっ！ ブルーノ、大変よ！」

ブルーノが一人感慨にふけっていると、アーシエが叫び声をあげました。

やれやれ、といったふうにはブルーノが振り返るとそこにはできての莓タルトに顔を突っ込んだアーシエがたっていました。こんなことは日常茶飯事なので、さほど驚きはしません。莓タルトも、こんなことがあるのかと余分に作っておりますから。

「また転んで莓タルトに顔面突っ込んだの？ いいから顔洗つてきなよ。俺が後始末やるから」

「うん、わかつたわ……じゃなくて！ お店の看板、看板！」

「あーっ！」

そうです、大変なことを忘れていました。お店に付ける看板を作るのを忘れていたのです。今からじゃ、時間も間に合わないでしょう。

「あ、あと三十分だわ……」

「……今日はしかたない。初日からこんな状況ってどういうことなんだろうね……。とりあえずアーシエは顔洗つて！」

「は、はい！」

本当に一体どうなることやら。この騒がしさに気付いたグリユツクの住民も店内を覗きこみます。そこには顔面タルトまみれになっている少女と、顔に青筋を立てている少年の姿。さすがに住民も苦笑しました。

「あ、みて！ お客さんが待ってるわ！」  
「君はみつともない顔をお客さんの前でさらすな！ さっさと顔洗え！」

さてはて、そんなふたりのコンディトライ。波乱万丈の舞台となるのは小さな田舎、グリユック。

双子が営む洋菓子店が、開店しました。

## 引越しの挨拶

やや不安が残る物語の幕開けでしたが、無事開店できただけでもよしとしましょう。

さて、最初に訪れたお客さんは甘い匂いにつられたわけでもなく、二人の騒がしさにつられた隣人の上品そうなお婆さんでした。

「いらっしやいませ！」

アーシエがここぞとばかりに　もう顔は莓タルトだらけではありません　明るい声で迎えました。お婆さんはいつい都会へ行ってしまった孫の顔を思い出して目を細めました。

店内を一通り見回すと、お婆さんはアーシエに話しかけました。

「お嬢さん、お名前は？」

「アーシエです！　店長はブルーノっていいです」

ブルーノが奥の厨房から不安げにアーシエを見つめました。ああ、またなにか粗相をおこさないだろうか、とやきもきしていて肝心のナッツを砕く作業が疎かになっていました。お婆さんはそのことに気づいてところどころ笑います。

「仲がいいのねえ。あなた達、兄妹なの？」

「はい！　双子です」

「そう。……いい匂いねえ。ねえ、アーシエさん。お勧めはなあに？」

お婆さんがやんわりと尋ねると、アーシエはショーウィンドウに並んでいるラズベリーパイを指しました。

「ラズベリーパイは私のお気に入りよ！　すごくおいしいの」  
「アーシェ！　君、お客様には丁寧な言葉づかいをしなくちゃ」

とうとう耐えきれなくなったブルーノが口をはさんできました。  
アーシェは「忘れてた！」と顔を赤らめたとび跳ねました。やつぱり仲がいいのね、とお婆さんは微笑ましく二人のやりとりを見つめています。

「ふふ、じゃあそれを買っわ。あなた達に一つアドバイスをしてあげる。グリユックでお店をやっていく秘訣」

二人は目を丸くして、真剣に耳を傾けようとなりました。アーシェなんか、シヨールウィンドウから身を乗り出しているくらいです。

「そうねえ、グリユックは気難しい人も多いのよ。よくも悪くも田舎でしょう？　新しくお店をだしても警戒しちゃったりとかあるのよ。だから、まず住民と仲良くなることをお勧めするわ」  
「仲よく？」

ブルーノが繰り返します。

「ええ。引越しの挨拶くらいはしておいたほうがいいかもしれないわね」

そう言ってお婆さんは優雅にほほ笑みました。一方二人はというと目から鱗、とはまた違いますが、大体はそのような思いでした。二人とも店を開店することに一生懸命で、肝心の引越しの挨拶を忘れていたのですから。キリルがこの場に居たのなら、きっとますます胃が痛くなっていることでしょう。

そんなわけで、お婆さんがラズベリータルトを買って去っていき  
ました。その後の客足はというとぱったり。店の外では興味深げに  
覗きこんでいるのですが、なかなか店に足を踏み入れません。

「しょうがない、アーシエ。君は引っ越しの挨拶をしてきてよ」

「ええっ！ ブルーノは一緒に行かないの？」

「……俺は店番しなくちゃしょうがないでしょ？」

にっこり笑うブルーノにアーシエは頂垂れました。てっきりブル  
ーノもついていくと思っていたからです。でも店の為なら仕方があ  
りません。ブルーノは瓶詰めジャムをたくさん入れたバスケット  
を持ってきました。

「はい、これ。引っ越しの挨拶の品。挨拶するときに、しっかりと宣  
伝してね」

「うっ……はい」

アーシエがやや頼りない足取りで去っていくのをブルーノは苦笑  
しながら見送りました。

外は晴天。春の陽気についとうとうとしがちですが、アーシエはし  
っかり気を引き締めました。まずは役場に行つて、地図を確認する  
ことにしました。役場は引っ越し手続きをする時にいったので、道  
は知っています。

知っていたはずなのですが。

「あれ、役場ってこっちじゃなかったかしら？」

迷ってしまいました。そんな大きな町でもないのですが、今見渡  
す限りは畑ばかり。家なんてどこにも見えません。

「……誰？」

後ろから声がきこえました。男の人の声で、凜としたよく透る声でした。

振り向くとそこには、シルバーブロンドの髪を風になびかせた青年がたっていました。

「ああ、よかった！ 私、アーシェっていうの。ブルーノといっしょにお菓子屋さんを開店したんだけど、お客さんが来ないの！ あ、ブルーノっていうのは私の双子の兄よ。それでお客さんがこないから宣伝をかねて引っ越しの挨拶をしようと思ったけれど、迷ってしまったの……」

「ちよつと落ち着け。何言ってるか早口すぎてわからん」

シルバーブロンドの青年が呆れたようにアーシェを見つめました。

「ええと、とにかく役場に行きたいの」

「端折り過ぎだ。えーと、お前アーシェだっけ。とにかくついてこい。役場は反対だ馬鹿」

さらりと悪態をつくくと、青年はくるりと方向転換をして歩き始めました。アーシェは慌ててそれについていきます。これがなかなか青年の歩く速さや歩幅が大きいので、アーシェもついていくのに一苦労でした。それに、重たいジャムが入ったバスケットを持っているので当然です。

「それ、持ってやる」

「へ？」

青年がひよいとバスケットを持ちあげました。

「わあ、ありがとう！」

「さすがに女に重いものを持たせるのは気が引けるしな」

そうこうして会話しているうちに、役場が見えてきました。青年にもう一度礼を告げ、アーシェは無事に役場に辿り着いたのでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8407z/>

---

そんな二人のコンディトライ

2012年1月6日19時48分発行